

# 琉球大学学術リポジトリ

中学生の持続可能な社会に対する意識及び行動に関する一考察  
— 家庭科における持続可能な社会に関する学習の検討に向けて —

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2023-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 善和 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019704">https://doi.org/10.24564/0002019704</a>

# 中学生の持続可能な社会に対する意識及び行動に関する一考察

## —家庭科における持続可能な社会に関する学習の検討に向けて—

土屋 善和\*

A study on junior high school student's consciousness and behavior  
for sustainable society

—Examination of learning about sustainable society in home economics—

Yoshikazu TSUCHIYA \*

### 1. 研究背景と本研究の目的

今日、持続可能な社会を目指すことが社会的な課題となっている。近年ではSDGs (Sustainable Development Goals) が注目され、国や地域、企業がSDGsと関連させた取り組みを積極的に推し進めていることから、持続可能な社会の構築に向けた行動や生活様式は世界的な潮流となっていることがわかる。

こうした中、学校教育においても持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) が取り組まれてきた。ESDとは、「現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む (think globally, act locally) ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動」(文部科学省HP)とされている。学校教育においても持続可能な社会の実現に向けた学習が求められているのである。

学校教育においてESDが取り組まれている教科の1つに家庭科が挙げられる。2017年・2018年に改訂された学習指導要領では、生活の営みに係る見方・考え方として「持続可能な社会の構築」が明示され、主に消費生活・環境領域においてその見方・考え方を働かせることとなった。

また改訂以前からも、生活を題材とする教科特性を持つ家庭科では、身近な行動から持続可能な

社会について考える学習が展開されてきた。例えば、重枝ら(2020)は、小学生を対象とした食生活を題材とした授業を実施した。1食分の献立作成から調理実習をするという題材構成の中で、環境への配慮という観点から実習を振り返らせ、地球にやさしい調理やかたづけの工夫を考えさせるという授業が設定されていた。また、土屋(2017)は、中学生を対象とした環境に配慮した行動からよりよい生活につなげる授業を実施した。この実践では、環境に配慮した行動を複数挙げた後、その行動の効果や影響を考えて最終的によりよい生活に結びつけていくという学習場面が設定されていた。この学習は、生徒が環境に配慮した行動がどのようにして自身のよりよい生活に結びつくのかを深く掘り下げて考えていくことをねらいとしていた。さらに、土屋ら(2019)は、高校生を対象としたチョコレートを教材とした批判的思考を促す授業を実施した。「商品の生産や流通・販売の背景にある社会的な課題や問題について意識すること」である「社会的な視点」の獲得を目指し、チョコレートの販売・購入に関わる消費者・企業・原材料の生産者(子どもたち)の視点からチョコレートのパッケージの企画をする場面が設定された学習である。このように家庭科では、持続可能な社会の構築に向けた意識や行動を子どもたちの身近な生活に結びつけた学習の充実が図られてきた。

以上のように、学校教育を通じて持続可能な社会の担い手・創り手の育成を目指し授業実践や学

\* 琉球大学教育学部 准教授

習内容の充実がなされている一方で、そもそも子どもたちは持続可能な社会に対してどのような認識を持っているのか、持続可能な社会の具体的なビジョンを持っているのかという疑問を抱いた。持続可能な社会に関わる授業実践例をみると、子どもたちの意識や行動変容につながる授業が行われており、その多くは実際に自分たちにどのような行動ができるのかを考えさせる学習展開となっている。しかし、持続可能な社会に向けた行動や意識変容を促すことに注力してしまい、肝心の「持続可能な社会」像の理解が疎かになってしまっているのではないかと考えた。

消費者庁（2022）が示した令和4年度版消費者白書によると、「環境問題・社会課題の解決の役に立ちたい」という問いに対して「当てはまる」（「とても当てはまる」または「ある程度当てはまる」）と回答した割合は、10歳代後半では48.8%、20歳代では42.7%であった。ここから、若者の環境問題・社会課題の解決への貢献意欲は高いとはいえない状況であり、社会の担い手としての自覚の醸成には若干の課題があることがうかがえる。また、損保ジャパン（2022）が15歳以上の男女を対象に実施した調査によると、社会課題に対して具体的な行動をしていることがあると回答したのは全体では3割ほどという結果であった。さらに15歳～19歳で具体的な行動をしていることがあると回答したのは42.9%であり、半数以上は行動をしていないという状況であった。そうした状況が生まれている要因の1つに、そもそも環境問題や社会問題の解決がどのような意味や影響があるのかが明確になっていないことも挙げられるのではないかと考える。つまり自分たちの生活にとって持続可能な社会がどのようなゴールや目標であるのかがはっきりしていないため、それに向かう行動ができないのではないだろうか。

以上より、これまである程度持続可能な社会に関わる学習をしてきた中学生が、「持続可能な社会」をどのように捉えているのかを把握する必要があると考えた。そこで本研究では、中学生の持続可能な社会に対する意識及び行動を質問紙調査より明らかにし、今後の学校教育あるいは家庭教育における学習の在り方を検討するための示唆を得ることを目的とする。

## 2. 研究方法

研究方法は、横浜市内の私立中高一貫女子校に通う生徒68名を対象とした質問紙調査を実施し、生徒の回答を分析・考察した。調査の実施時期は2020年1月である。なお本調査は、SDGsに関する学習の事前調査として実施した。

調査対象となった学校では、SDGs委員会があり、文化祭ではフェアトレードチョコレートを販売するなど、他の学校に比べ持続可能な社会に向けた行動に対する意識は高いと考えられる。また、中学3年生であることから、今まで家庭科に限らず社会科や総合的な学習の時間等で持続可能な社会に関わる授業は受けてきていると推測されるため、持続可能な社会に関する理解を一定程度は有していると考えられる。

次に今回の調査における質問項目を表1に示す。記述による回答はKHcoderを使用し分析を

表1 質問項目

質問項目	回答方法
1. 持続可能な社会について	
(1) 「持続可能な社会」とはどのような社会のことを指すと思いますか？	記述
(2) あなたは普段から「持続可能な社会」に関わるあるいは意識した行動をしていますか？	4件法
(3) (2)で「よくしている」「少ししている」と回答した方のみ答えてください。具体的にどのようなことをしていますか？	記述
(4) (2)で「ほとんどしていない」「まったくしていない」と回答した方のみ答えてください。その理由を答えてください。	記述
2. 普段の消費生活について	
(1) 価格を優先して商品を選んでいる。	4件法
(2) 商品の表示を見てから買うかを決める。	4件法
(3) 欲しい物は事前にいろいろ調べてから買うようにしている。	4件法
(4) 社会的な問題に対して取り組んでいる企業の商品は多少高くても買いたいと思う。	4件法
(5) 自分の消費行動が自分以外の何か（人や物）に影響を与えていると思う。	4件法

した。また、4件法による回答は単純集計により分析をした。

### 3. 結果及び考察

#### (1) 持続可能な社会に対する捉え

まず、『持続可能な社会』とはどのような社会のことを指すと思いますか」という問いに対する生徒の回答結果をみていく。

回答を詳細にみる前に、この問いに対して無回答及び「わからない」と回答した生徒が全体の2割ほどいたことがわかった。ここから、そもそも持続可能な社会自体どのような社会なのかかわからないという生徒が一定数いることが推察される。このような生徒は、持続可能な社会に対するビジョンが持っていないことにもなるだろう。今回中学3年生を対象としており、先述したように持続可能な社会についてはある程度の理解があると考えられる。しかし、持続可能な社会について答えられないあるいはわからないという生徒は、持続可能な社会を理解できていないものと推察される。その1つの要因としては、これまでの学習の中で持続可能な社会自体の理解を促す場面や深く考える場面が設定されてこなかった可能性があると考えられる。それはつまり今までの学習が、「持

続可能な社会」という目指すべき社会像・目標が明確になされていないまま進められていた可能性があることも同時に示唆される。

次に、無回答とわからないと回答した2割の生徒を除いたその他の生徒の記述をみていく。まず、生徒の記述に頻出する語を抽出した結果を表2に示す。抽出語をみると、「社会」「環境」「地球」「温暖」「資源」「人」「優しい」という語句が上位であった。持続可能な社会を説明する際に、特に「環境」が多く用いられていることから、持続可能な社会が環境と関わると理解していた生徒が多いことがわかる。

さらに、生徒の記述より共起ネットワークを作成したところ、図1の結果となった。

まず、「環境」「優しい」「良い」「人」につながりがみられた。ここから、持続可能な社会を環境や人に優しい・良い社会と捉えて

表2 「持続可能な社会」についての抽出語

抽出語	頻度
社会	31
環境	16
地球	13
温暖	5
資源	5
人	5
優しい	5
安全	4
思う	4
未来	4
自然	3

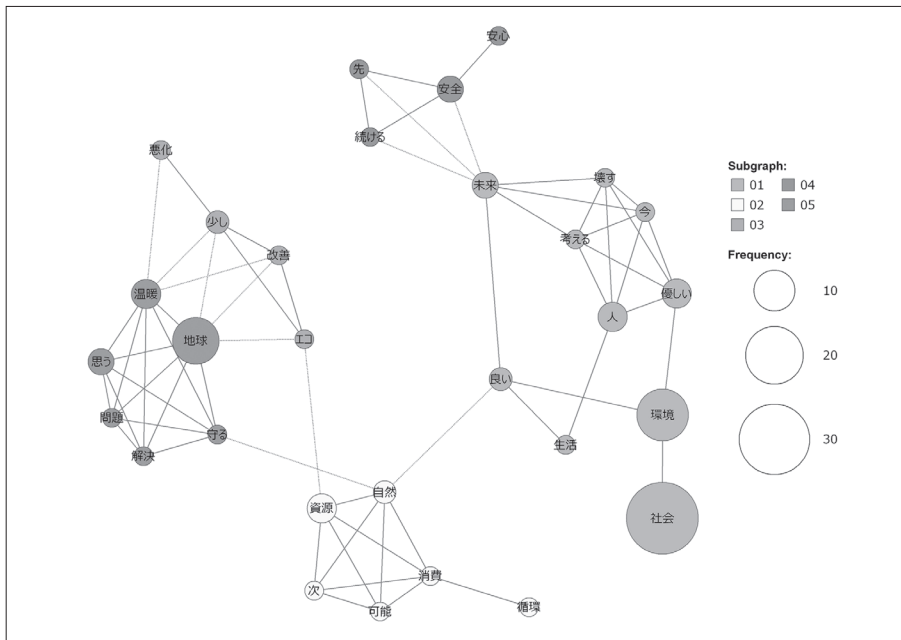


図1 「持続可能な社会」とはどのような社会のことを指すのか (共起ネットワーク)

いることがわかる。しかし、さらにそれらの語句が使用されている生徒の記述をみると、「環境が良い」「環境などを良くしていく社会」や「環境に優しい感じ」という内容であり、具体的にどのように優しいのかあるいは良いのかということまでは言及されていなかった。ここから、持続可能な社会には漠然と優しい・良いというイメージを持てているだけで、何がどのように優しい・良いのかということまではつかめておらず、具体的な社会像までは持てていないことが推察される。

また、「安全」「安心」につながりがみられた。これらの語句が用いられていた生徒の記述をみると、「みんなが安心安全で毎日暮らせるようになる社会」や「安全な未来がずっと続けていけるような社会」という内容であった。つまり持続可能な社会とは、安心や安全が続くような社会であると捉えていたことがうかがえる。しかし、どのような社会が安全や安心なのかということまでは言及されてはいなかった。ここでも、漠然と安心・安全というイメージは持てているものの、持続可能な社会がどのようにあるいはどのような安全・安心なのかということまでは明確にはなっていないものと推察される。

そして、「資源」「消費」「循環」につながりがみられた。それらの語句が使われた生徒の記述をみると、「消費されるだけではなく、循環する社会」や「無計画に自然や天然資源を消費するのではなく、次の世代のために植林や再生可能エネルギーなどの使用をして、資源を残す社会」という内容であった。ここから、循環型社会を具体的な持続可能な社会像としており、循環させるものを自然や資源と想定していたことがわかった。つまり、循環が持続を可能にすると考えており、自然や資源が持続する社会像を持っていると推察される。

最後に「温暖」「問題」「解決」や「悪化」「改善」につながりがみられた。これらの語句が用いられた生徒の記述をみると、「太陽光や風力などの力で電気をつくり、地球温暖化の対策をするのだと思う」や「地球温暖化が少しでも早まらないように工夫したり、地球の悪化を少しでも止めること」、「人口が増える中で、地球温暖化の問題を解決して、地球を守るのかなと思う」、「エコなどをして地球の環境を少しでも改善する社会」など

の内容であった。ここから、持続可能な社会を問題を解決して現状を良くした社会と捉えていることがわかった。

確かに現状をよくするためには、今ある問題を解決・改善することが求められるだろう。その一方で、問題に対処するあるいは問題を解決するという視点だけではなく、新しい生活を創るという「よりよい生活」の視点でも持続可能な社会を捉えることが、ESDを進めていく上では必要である。問題というマイナスな部分をなくしていくことは、これまでの負債を処理するというイメージとなりやすく、「しかたなく」という意識が働いてしまう可能性がある。しかし、よりよい生活という視点で持続可能な社会を捉えられれば、持続可能な社会に向けた行動は今よりもさらに良くするための働きかけと認識されるだろう。その結果、「そうしたい」という意識を持つことになり、行動を起こす意欲にもつながる。したがって、持続可能な社会の実現は問題に対応をするというだけではなく、今よりもよい生活を築くという視点で捉えることができれば、持続可能な社会への実現に向けた意欲はより高まると考えられる。つまり、持続可能な社会が「自分たちの生活がよりよくなる、発展していく社会」であるという認識を持つことも大切である。

以上のことから、中学生は持続可能な社会を様々な視点から捉えていることがわかった。地球や環境に優しい・良い社会、安心安全な社会、資源や自然が循環する社会、温暖化などの問題が解決・改善していく社会等が挙げられており、多くは自然環境に関する内容であったことが特徴的であった。しかし一方で、漠然と良いイメージを持てているだけで、具体的な社会像が見えていない可能性があることが示唆された。

## (2) 持続可能な社会に向けた行動

次に、普段から「持続可能な社会に関わるあるいは意識した行動をしていますか」という質問の回答結果を示す(図2)。

まず、「よくしている」と回答した生徒は1.4%であったことから、実生活においては持続可能な社会に関わる行動は頻繁に行われていないことがわかる。また、「よくしている」「少ししている」を「している群」とすると、している群は36.7%

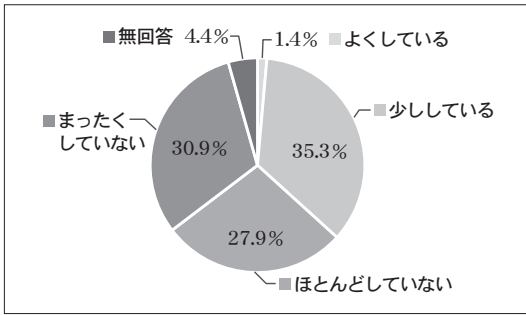


図2 持続可能な社会に関わるあるいは意識した行動をしているか (N=68)

であり4割にも満たなかった。一方、「ほとんどしていない」「まったくしていない」を「していない群」とした場合、していない群は58.8%と半数以上であり、している群を上回っていた。このことから、実生活において持続可能な社会のために行動をしている生徒は多くはおらず、実際に持続可能な社会に向けた行動ができているとは言い難い状況であることが推察される。

次に、生徒が実際に行っている持続可能な社会に関わる行動を把握するために、「している群」の生徒に対して尋ねた「具体的にどのようなことをしていますか」という問いへの回答をみていく(表3)。

表3 実生活における持続可能な社会に向けた具体的な行動

身近な行動、自身の生活における行動	地域・社会・コミュニティへの参画
ご飯を残さない、ごみの分別、ペットボトルの回収、レジ袋を使わない、エコバッグを使う、歩いたり自転車に乗る、電気のつけっぱなしや水の出しっぱなしをしない、フェアトレード商品の購入等	地域のボランティアへの参加、自治体の掃除への参加、ごみ拾い、募金活動を行う、学校のプロジェクトへの参加等

生徒の記述をみると、「ごはんを残さない」や「ごみの分別」などの「身近な行動、自身の生活における行動」と「地域のボランティアへの参加」や「ごみ拾い」などの「地域・社会・コミュニティへの参画」の2つに分けることができた。多くは「身近な行動・自身の生活における行動」であったが、地域や社会参画をして持続可能な社会に関わる取り組みを行っている生徒がいることもわかった。

(3) 持続可能な消費行動を行わない理由

次に、「ほとんどしていない」「まったくしていない」と回答した生徒に対してその理由を尋ねた際の回答をみていく。記述より共起ネットワーク

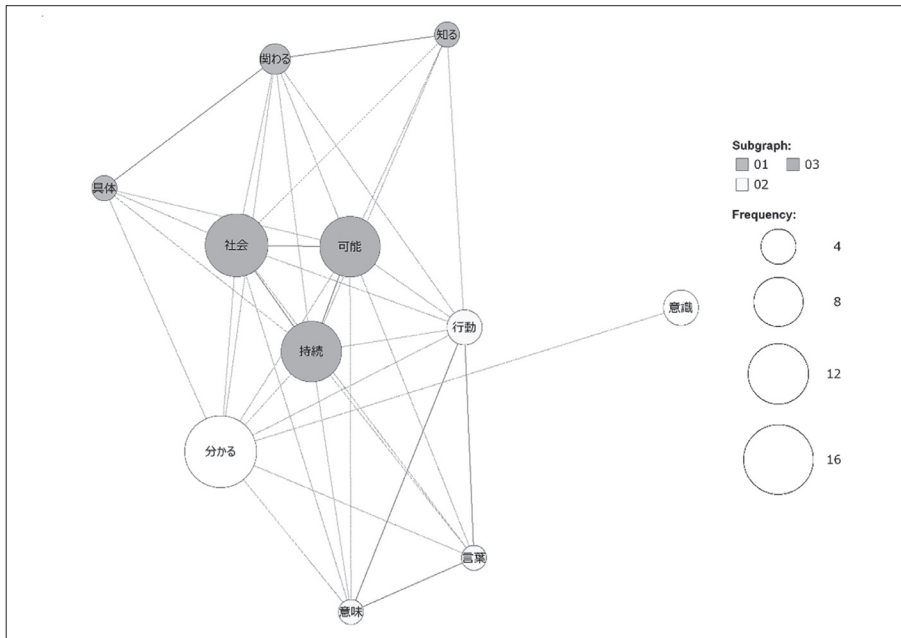


図3 持続可能な社会に関わる行動をしていない理由 (共起ネットワーク)

ワークを作成したところ、図3の結果となった。

まず、「分かる」と「行動」につながりがあることがわかった。これらの語句が用いられた生徒の記述をみると、「持続可能な社会に関わる取り組みがどのようなものか知らないから」や「どのような行動なのかよく分からない」、「今行っている行動が持続可能な社会に関わる行動なのか分からない」などの内容であった。ここから、持続可能な社会に向けた行動がわからないため行動できないという生徒がいることがわかった。

また、「分かる」は「持続」「社会」ともつながりがみられた。それらの語句が用いられた生徒の記述をみると、「そもそも持続可能な社会がよく分かっていないので、できているのかできていないのかわからない」という内容であった。さらに、「分かる」は「意味」にもつながりがあり、それらの語句が用いられている生徒の記述は、「持続可能な社会という意味がはっきり分からない」や「持続可能の言葉の意味が分からないからその行動をしているかが分からない」という内容であった。そして、持続可能な社会とはどのような社会かという最初の問いに対して無回答及び「わからない」と回答した2割の生徒は、「していない群」に属していた。つまり、そもそも持続可能な社会がわからないため行動できない、何をしてもいいのかわからないという生徒もいることが推察される。

以上より、実生活において持続可能な社会に向けた行動をできない理由については、どのような行動かがわからないということと、持続可能な社会がわからないことの2つが挙げられていた。それは裏を返せば、持続可能な社会についての十分な理解が得られれば、行動に移せるようになる可能性があるとも考えられる。したがって、まずは、持続可能な社会に関する十分な理解が必要である。

(4) 普段の消費行動

次に普段の消費生活について尋ねたところ、図4の結果となった。

まず、「価格を優先して商品を選んでいる」と尋ねたところ、「とてもあてはまる」は22.4%、「少しあてはまる」は64.2%であり、あてはまると回答したのは8割以上であった。ここから、商品購入については価格を優先する傾向があることがわかる。その一方、「社会的な問題に対して取り組んでいる企業の商品は多少高くても買いたいと思う」に対して「とてもあてはまる」と回答した割合は19.4%、「少しあてはまる」と回答した生徒の割合は43.3%であり、あてはまると回答したのは6割ほどであった。価格を優先していてもエシカル消費を意識している生徒は半数以上いることがわかる。また、「自分の消費行動が自分以外の何か（人や物）に影響を与えていると思う」に対して「とてもあてはまる」は19.7%、「少しあて

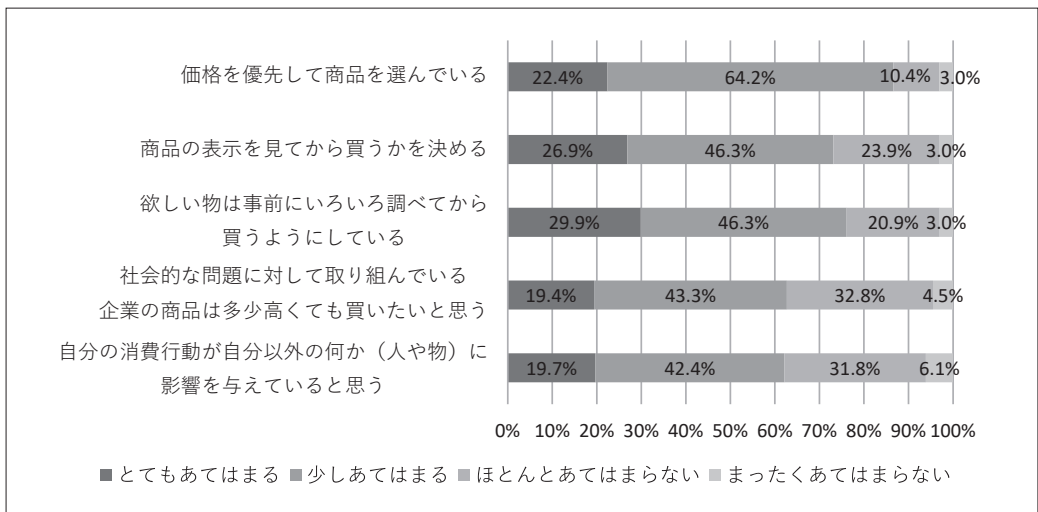


図4 普段の消費生活に関する意識と行動

はまる」は42.4%であり、あてはまると回答したのも6割ほどであった。このことから、6割ほどの生徒は社会に影響を与える消費者としての自覚を有していることがわかった。

以上より、価格を優先しつつもエシカル消費への意識や消費者としての自覚を持っている生徒が一定数いることがわかった。

#### (5) まとめ

今回、中学生を対象とした質問紙調査を実施したところ、持続可能な社会に関する理解や実態等が明らかとなった。

持続可能な社会については、優しく良い社会、安心安全な社会、循環型社会、温暖化などの問題が解決・改善される社会であり、生徒の多くは自然環境に関わった社会であると理解していたことがわかった。その一方で具体的な社会像はつかめていない可能性があることが推察された。

実生活における持続可能な社会に関わる行動については、「よくしている」「少ししている」の「している群」が4割ほどであったことから、実生活で持続可能な社会に関わる行動ができていないと言いき難い状況であることがわかった。していない理由としては、具体的な行動がわからないこととそもそも持続可能な社会がわからないことが挙げられていた。

普段の消費行動については、価格を優先している生徒が大半であった。しかし、エシカル消費に意識を向けている生徒や社会等に影響を与えるという消費者としての自覚を持っている生徒も6割ほどいたことがわかった。

以上より、エシカル消費に対する意識や影響力がある消費者としての自覚がある一方で、実生活において持続可能な社会に向けた行動ができていない生徒はあまり多くないことがわかった。そしてこのような状況を引き起こしている要因の1つとして、持続可能な社会像が具体化・明確化されていないことが推察された。このことから、持続可能な社会に対する理解を深める必要性が示唆された。

本調査はSDGsの事前調査として実施したため対象は限定されており、学校や地域の特性が少なからず調査結果には影響したと考えられる。先述のとおり調査対象はSDGsに関する取り組みや文

化祭でのフェアトレードチョコレートの販売などを実施している学校に通う生徒であるため、他の学校よりも意識が高い生徒で得られた結果であると予想される。したがって、本調査結果を一般化することは難しいだろう。しかし、他の学校よりも意識が高い生徒の実態ということを踏まえると、調査結果から得られた示唆は今後の学習を検討する上では有益であると考えられる。

## 4. 中学生の意識と行動から考える家庭科学習の在り方

本研究の結果及び考察を踏まえ、今後家庭科における持続可能な社会に関わる学習の在り方について検討をする。

これまでも持続可能な社会に向けた行動や取り組みについて考えるという学習場面や実践は多くみられた。しかし、考察でも触れているように、そもそも持続可能な社会とはどのような社会なのか、何が持続し、持続するとどうなるのかなど、「持続可能な社会」自体を理解するあるいは深く考える場面設定が重要であるだろう。つまり、持続可能な社会というゴールや目標を明確化する学習場面が必要である。

持続可能な社会という目標が明確になれば、その実現に向けた行動や取り組みもさらに具体的に考えることが可能となる。また、自分たちが何のために持続可能な社会を目指すのかも明確になるため、行動の必要性や重要性についても理解することになり、生徒の意識や行動変容につなげることができる。

しかし、そのゴール自体が自分とは関係のない社会のこととして捉えられてしまっただけでは、実際に行動に移すことは困難となるだろう。そこで、それらを自身のよりよい生活と関連させることで、理解を深めつつ持続可能な社会に向けて取り組まなければいけないという必然性を持たせるようにする必要があると考える。生活を題材としている家庭科なら身近な事象から持続可能な社会につなげた学習が可能である。また、家庭科では個人・家庭・地域・社会という空間軸から学習を捉えることが示されている。個人から家庭・地域・社会へ視点を広げる、あるいは社会から地域・家庭・個人へと落とし込んでいくことで、持続可能な社



会を他人事ではない自分事として捉えることが可能となると考える。

持続可能な社会を具体化・明確化しつつ理解を深める学習については、例えば、SDGsが持続可能な社会のための目標設定であることから、SDGsの内容理解から持続可能な社会を理解していく学習が考えられる。SDGsは自然環境だけではなく、私たちの生活に関わる様々な事柄で持続可能な社会のためのゴールを設定しており、持続可能な社会を見つめる視点が多岐にわたっている。つまりSDGsの視点から捉えることで、自然環境に留まらず様々な視点から広がりをもって持続可能な社会像を理解することが可能となる。そうした際にも、生徒がSDGsを自分の生活と関連させて理解できるかが重要である。

また、持続可能な社会を自分の言葉で説明する活動や持続可能な社会となることで自分の生活がどのようになるのかを考える活動なども効果的である。自分の言葉で相手に伝わるように説明するためには、十分な理解が必要である。借り物の言葉ではなく、子ども自身の言葉で語らせるようにすることで、子どもたちの持続可能な社会に対するより深い理解につながると考えられる。

持続可能な社会を自分の生活に引き付けて考えると、自身の生活の視点から持続可能な社会を捉えることが可能となり、その結果、持続可能な社会像をより具体的かつ明確に掴むことができる。また、持続可能な社会の実現を社会的な取組として捉えるのではなく、自分事として捉えることにもつながる。その際に、持続可能な社会になると自分の生活がどのように良くなるか・生活しやすくなるかといった、自身の生活における「良さ」に着目させるとよいだろう。

以上のように、本調査結果より得た示唆から持続可能な社会に関わる学習の在り方について検討することができた。今後の課題は、本研究の知見を活かし、持続可能な社会の担い手の育成につながる授業を検討し実践することである。

## 引用文献

- 文部科学省HP <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm> (2022年10月30日アクセス)  
重枝孝明・西敦子・森永八江・坂本真友香・星

野裕之・西尾幸一郎・五島淑子. (2020). 持続可能な社会の担い手を育成する家庭科授業づくりー環境の視点から調理実習を考えるー. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, (50). 107-114

消費者庁. (2022). 令和4年度版消費者白書 [https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer\\_research/white\\_paper/assets/2022\\_whitepaper\\_0003.pdf](https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/white_paper/assets/2022_whitepaper_0003.pdf) (2022年10月30日アクセス)

損保ジャパン. (2022). 「SDGs・社会課題に関する意識調査」～学ぶ機会があったのは約6割、学習機会の創出に向け企業に求めるものとは～ [https://www.sompo-japan.co.jp/-/media/SJNK/files/news/2022/20220715\\_1.pdf?la=ja-JP](https://www.sompo-japan.co.jp/-/media/SJNK/files/news/2022/20220715_1.pdf?la=ja-JP) (2022年10月30日アクセス)

土屋善和. (2017). 批判的思考を促す「深く考える協働場面」を導入した授業. 国民生活センター, (64). 25-26

土屋善和・堀内かおる・千葉眞智子. (2019). 家庭科におけるチョコレート教材とした批判的思考を促す授業実践ー他者と関わり多様な視点から吟味・検討する活動を通してー. 日本家庭科教育学会誌, 62 (1). 15-26